
迷子の竜、お城に行く

黒辺あゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷子の竜、お城に行く

【Nコード】

N6358U

【作者名】

黒辺あゆみ

【あらすじ】

一族の引越しの最中、親の背中から落っこちて迷子になった竜の子ポチ。ポチを拾ったコニーと一緒に、飼い竜ライフを満喫中。そして只今絶賛飛行特訓中。そんな仲良しなコニーとポチは、ひよんなことからお城に行くことになりました。「迷子の竜の冒険記」の続きのお話です。

王子様襲来 前編

Side コニー

そのとき、コニーはポチと散歩をしていた。

「今日もいい天気だねえポチ」

「うむ！散歩日和である」

のんびりと村の中を歩くコニーとポチに、村人たちは声をかけてくる。

「コニー！今度竜にのせてくれよ！」

「アオさんがいいって言ったらねー」

「ポチ、あんた少し太ったんじゃないかい？」

「む・・・、本日は少々食事を減らすことにする」

そんなふうには、村人たちと他愛ないおしゃべりをするコニーとポチを、じつと見ている姿がある。その姿は、一定の距離を保ってずっとコニーたちのあとをついてきていた。その者は小綺麗な服を着ており、ひと目で村人ではないことが分かる。つまりは、ずつついてきていることが最初から周囲にバレバレであった。

「ねーポチ、あの人なにかなあ」

「怪しい人間には近寄らない方がよいのである」

「そーだねー」

コニーとポチは、後ろからずつついてくる不審者のことを気にしないことにした。

村人たちも、コニーたちに会いに来る見知らぬ人間に慣れていただけから特別咎めることをしなかった。

そんなわけで、その不審者は村の中で放置されているわけなのであつた。

不審者が、コニーとポチに声をかけることが出来ずに困っていると知らずに。

「にーちゃん、ただいまあ！」

「おかえりコニー、ポチ」

家の表で作業をしていた兄に、コニーはぱたぱたと駆け寄る。

「何か面白いことはあったかい？」

いつものように村の様子を尋ねたピートに、コニーはにっこり笑顔で答えた。

「うん！怪しい人がいた！」

面白いどころか、事件である。ピートは心配気な表情をする。

「怪しいって、どんな奴だい？」

「あそこにいる人！」

と自分の後ろを指差せば、果たしてそこに先程からついてきていた不審者がいた。

「あのね、俺たちの散歩にずーっとついてきてたんだ」

「……」

ピートが無言でその不審者の姿を観察した。

「なにしてるんですか？」

ピートが不審者に話しかけるも、返事はない。

「にーちゃん、とーちゃん呼んだほうがいい？」

コニーがピートに尋ねると、ちょうど家の中から母親が出てきた。

「あらあら、どうしたの？」

「かーちゃん、怪しい人！」

コニーが母親に不審者を示して説明する。

「あらあら、確かに怪しいわあ。ここにいるはずのない人ですものねえ。何してらっしゃるんですか王子様？」

Sideポチ

ポチは都から村に戻って、また身体がひとまわり大きくなった。コニーを背中に乗せることができるくらいの大きさである。しかし、コニーを乗せてはまだ飛ぶことができない。

「早く空のお散歩したいね」

とコニーにねだられたので、ポチはこれから一段と練習するつもりである。

火を吹くのは格段に上手くなった。青い竜のおかげで、コツをつかんだのだ。その甲斐あって、コニー一家は炭焼き仕事が楽になった。役に立ててポチとしても満足である。

本日のコニーとの散歩の途中で引っ掛けた不審者は、なんとお城の王子様であった。

王子様はコニーの兄の親友で、相談したいことがあってやってきたらしい。

この事実を聞き出すまでに、実に一時間を要した。なんでも王子様は、極度の対人恐怖症らしい。そんな性格でよく王子様家業をやっているなどポチは変に感心してしまった。

対人恐怖症の王子様は、今もコニーたちから五メートルほど離れて立っている。これが、王子様が他人と接する時の適正距離らしい。

その距離を保とうとするならば、当然家の中での会話は無理である。その上王子様が小声でボソボソ話すおかげで会話が辛い。そんな王子様とどうやって会話するかというと、王子様とコニーたちの間を、ポチがメッセンジャーよろしく行ったり来たりするのである。人間は怖いが動物は平気なようである。いや、動物ではなくポチはれっきとした竜であるのだが。

最近の運動不足もあってか、行ったり来たりの繰り返しで、少々疲れてしまったポチであった。

王子様襲来 前編（後書き）

お久しぶりの「迷子の竜」であります。「都に行く」の続きになります。どうぞお楽しみください！

王子様襲来 後編

Sideコニー

ポチとの散歩の途中で出会った王子様は、親友のピートにどうしても相談したいことがあるそうだ。しかし五メートルの距離は、繊細な相談事をするには不向きである。メッセージャーポチはがんばりすぎてへばっている。これで会話の手段を絶たれてしまった。

そんな絶体絶命(?)な状況を打破してくれたのは、意外な存在であった。

ばっさばっさと風を切る音がしたかと思ったら、コニーの家の隣の空き地に、青い竜が着地した。

「アオさんだ。こんにちわ」
久しぶりに遊びに来てくれた青い竜に、コニーは笑顔であいさつをする。

「おおコニー、元気そうだな。ポチはなにやらつぶれているが」
べちゃっとなつぶれているポチを、青い竜は尻尾の先でつんつんとつく。

「ちよつといっぱい動いたらつかれちゃったんだって」
「少し痩せるといい」

青い竜の厳しい意見に、ポチは尻尾を振るばかりであった。

しかし、青い竜は遊びにきたわけではないらしかった。

「これ王子、そろそろ帰らねばならぬぞ」

青い竜は王子様にそう言って身体を伏せた。

「あれ、アオさんが王子様を連れて来たの？」

普通的手段でやってきたにしては、妙に小綺麗な格好だとコニーだつて不思議に思っていたのだ。なにせこの村は、街道から外れた辺鄙な場所にあるのだ。旅人は、以前おじさんがやってきたときのように、くたびれた襤褸切れみたいになっているのが通常である。

「そつだ。どうしても行きたいところがあると頼まれてな。日があ
るうちに帰るならばよかるうと思うたのだが」

王子様がこつそり村に入りたいといつので、アオさんは村から少々
離れた場所で待っていたらしい。だが心配して様子を見に来てみれ
ば、案の定対人恐怖症な王子様は、目的遂行できずにいたというわ
けであつた。

「だってまだ用件を話していないだと？短時間で意見交換を果たす
など、そなたには無理難題であろう。いつそ城まで共に来てもらえ
ば万事解決ではないか」

青い竜の意見に、王子様は大きく頷いている。

「にーちゃん、王子様が一緒にお城に来てほしいんだって。お城っ
てどんなとこだつたか、後でおしえてね」

コニーは青い竜のことばを兄に通訳してやる。地面でへばってつぶ
れているポチを、しゃがんでつつきながら。

「えー、城にいくのかあ。遠いなあ」

ピートはあまり乗り気ではないようだ。

「アオさんが送ってくれるよ。速いよ、びっくりだよ」

「うーん」

コニーのコメントに、ピートはうなる。青い竜に乗るということに
心を揺さぶられているらしい。

「そつだ、コニーとポチも来るといい。城にはポチの身内がいるぞ」

青い竜が、突然そんなことを言う。完全に他人事だと思っていたコ
ニーはびっくりした。

「えー、ホント!？」

だがポチは身内という言葉に心配したらしい。

「父ではあるまいな」

嫌そうな顔でポチが呟く。

かくしてコニーとポチは、ピートと共に城に行くことになった。

S i d eポチ

城までの空の道のりを、今回は練習だということで、ポチは単独飛行をすることになった。

「ポチがんばれー！」

青い竜の背中で、コニーが応援してくれている。

しかし、風に巻かれてくるくると回っているポチは、正直コニーの声援など聞こえてはいなかった。特訓の成果で高い場所を飛べるようにはなったのだが、いかんせん風に遊ばれてしまう。はっきりにって風になめられていると言ってもいいだろう。

「竜としての威厳が足りないのではないか？」

青い竜はそんなポチの飛びっぷりを見て、かわいそうな子を見るような目をする。

「吐きそうなのである・・・」

回り過ぎて風に酔ってしまったポチなのであった。

お城に到着

Sideポチ

お城にたどり着いたときには、ポチはべっちやりと地面につぶれてしまった。

こんなにたくさん飛んだのは初めてであるが、ポチはお城まで飛びきったのだ。

「やればできるではないか」

青い竜がポチを褒めてくれているが、今は正直褒め言葉より水がほしいポチであった。

「ポチすごーい！あのくるくる回るのかっこよかったよ！」

ポチが目を回していたのを知ってか知らずか、コニーがそんなことを言ってくる。しかしそれにも抗議する元気がないポチであった。

「ほらポチ、水だよ」

そんなとき、空気を読んでもくれるのはいつだってピートである。ポチの言葉が分からずとも、気持ちを察してくれるありがたい存在である。

「あ、そうだ。ポチおやつ食べる？」

コニーが自分の背中のリックから、りんごのパイを出した。コニーたちは青い竜の背中で食べたらしい。運動をしてお腹が空いたポチは、コニーにもらったりんごのパイを有難く食べた。そんなコニーとポチの様子を、五メートル離れたところで王子様が見ていた。

ちなみに、対人恐怖症の王子様は、コニーたちと一緒に青い竜の背中に乗ってきた。巨大な竜の背中とはいえ、五メートルの距離をとるのは無理である。それゆえに近距離での長時間の他人との接触到に疲れた王子様も、ポチと似たり寄ったりな状態であった。

こうして、一名と一匹がグロッキー気味な状況で、一同は城に到着したのであった。

S i d e コニ

お城は広がった。

都のおじさんの家に行ったときも、そのお屋敷の広さにビックリしたが、お城はそのおじさんの家がいくつはいるのか数え切れない大きさであった。

「大きいねえ、ポチ」

おやつを食べて復活したポチに話しかける。

「建物内を移動するだけで日が暮れそうである」

ポチもお城の広さに驚いたのか、あんぐりと口をあけている。コニはものめずらしさにお城の門の辺りをきよるきよると眺めていた。そんな一同の様子を、門番の二人が興味深そうに観察している。対人恐怖所の王子様は、すでに先にお城に入っていた。

ちなみに、青い竜で着陸したのはお城の裏手であったが、せつかなので正面の門から入城しようということになり、わざわざ正面門まで回ってきたのだ。いわばお城を半周ぐるっと回ったわけであり、非常に遠かった。

「にーちゃん、あそこに何かある」

コニは城の敷地内に何かを見つけた。コニがたたたと走り寄った先には、厳ついひげを生やしたおじさんの銅像があった。

「おひげふさふさー、あたまぴかぴかー」

コニとポチが、銅像を台座の下から眺めている。

「初代国王の銅像だそうだよ」

ピートが門番たちから聞いたらしい情報を教えてくれた。

「いちばんはじめの王様だって」

「光り輝いているのである、頭が」

微妙に失礼なコニとポチである。

コニは、台座の上に登っていた。ポチは銅像の頭によじ登っていた。子供のすることだから、と門番たちも細かいことを言わずにいた。

それがいけなかったのだ。

手を差し出したポーズの初代国王の銅像に、
「握手握手」

とコニーが手を握ったとき。
バキッ!

小気味良い音がした。門番たちが振り返ったときには、コニーの手には肩からもげた銅像の腕が握られていた。

「……………」

「……………」

コニーとポチはちよつと考えた。そしてピートを振り返る。

「にーちゃん、銅像壊れた」

「うむ、壊れたのだ」

コニーはもげた銅像の腕をぶんぶん振り回す。それを見た門番たちの表情は青くなった。

ピートも、ちよつと考えた。

「すみません、ちよつと、壊れてしまいました」

さわやか笑顔で門番たちに報告する。

「今のは、あの少年が壊した……………」

「……………」壊れました「……………」

コニーに、銅像接近禁止令が出された。

ある騎士の主張

その日、朝から王子様が行方不明であった。

「さがさないでください」という書置きを残して姿を消した王子様を、騎士団とメイドが総出で搜索したものの見つからず。さあどうする、とお城中が大混乱の中、当の本人は夕暮れ時にひょっこり帰ってきた。後に乳母から聞いたという話によると、親友にどうしても相談したいことがあり、竜に乗って出かけていたそうである。だったら最初からそう書置きに書いてほしい。そうしたらお城中大搜索などする必要もなかったのに。馬小屋を搜索場所に割り当てられた自分はさんざん馬に邪魔にされてフンまみれになったというのに。

そんなわけで、お城に戻ってきた王子様は青年と少年と黒くて丸い生き物を一緒に連れて帰ってきた。青年が親友で、少年は彼の弟で、黒くて丸い生き物は少年の契約竜であるとか。幼く見えても魔術師であるらしい。人は見かけて判断してはならないということであろうか。いや、それよりも。あんなに丸い竜がいるというのが驚きである。竜というのも多種多様であるらしい。

そんな王子の客人たちは、お城に着いて早々に問題を起こした。

なんと客人の弟の方が、正門の敷地にある初代国王の銅像を壊してしまったらしい。

お城の者たちは、罰当たりな、という感想よりも、どうやって？という疑問が先に湧いてきた。あんな硬くてデカイもの、どうやって壊れるというのであろう。門番の話によると、弟が素手で腕をもいだらしい。幼くても魔術師、摩訶不思議なことをするものだ。

そんなわけで、いくら王子様の客人とはいえお咎めなしというわけにもいかない。なので騎士団長の提案で、連帯責任として兄弟と竜には騎士団の仕事である害獣退治を手伝ってもらうことになった。

兄弟と竜は集合場所に、身軽な格好で現れた。今からピクニックにでも行くような格好であった。特別な装備というのは、兄は腰から剣を下げ、弟は魔術師が使う杖を背負っていたくらいである。竜が背負っていたリュックには、弁当が入っているらしかった。

ベテランの騎士は、

「遊びに行くのではない！」

と怒っている様子であった。しかしそんな騎士に兄の方は、

「そんな重装備ではできるものもできませんよ」

とさわやか笑顔で返していた。

一方弟の方は、竜とどこで弁当を食べるかの相談をしていた。こっちはまるつきりピクニック気分であった。

兄弟の家は木こりであるらしく、普段から山道を歩きなれているため足取りは軽かった。弟も特に遅れることなく先をゆく兄についていく。歌すら歌いながら歩いていく兄弟のその余裕ぶりの後方で、騎士団の面々はせえせえと息を切らしていた。あの丸い竜にすら遅れるのは非常に問題であった。

「だから装備が悪いと言ったのに」

と兄に厭味を言われる始末。しかしこのことで山に入る際の装備を見直してもらえるならば、下っ端騎士としてはありがたいものだ。

そんな一行が害獣退治をはじめると、兄弟の独断場になった。

まず、兄は驚くほど身軽であった。あれは人間ではない、何かそういう動物であると言ってもらった方が納得できる。森に逃げた害獣を、木々の間を飛ぶようにして追いかける。そして一撃で急所を襲うのだ。

そして弟の方は規格外であった。杖をかざして、

「凍れ〜」

と唱えるだけで、大人の倍くらいの大きさの害獣を氷漬けにしてしまった。呪文を唱えないのかと尋ねると、

「あれ言わないとダメなの？舌噛むから嫌だなあ」

と答えた。それで呪文を省略してしまうあたりが規格外である。

ちなみに何故凍らせる魔術なのかというと、以前山で炎の魔術を使って、山火事を起こしかけたのだそう。母親にたっぷり怒られたらしく、山で炎の魔術を使うのはしないのだそう。

そんな兄弟は、景色のよい場所で竜が背負ってきた弁当を食べ（竜の仕事はこれだけであつた）、氷漬けにした熊の害獣を王子様への土産に持って帰つた。兄弟の住んでいる村では、この熊はご馳走らしい。毛皮も傷がついていないので売れるのだそう。ちなみにその熊の毛皮は、土産を喜んだ王子様の部屋の敷物になつた。

後からわかつたのだが、兄弟はあの、英雄と魔女の子であるらしい。通りでいろいろ凡人と違ふはずである。

とりあえず、あの兄弟に喧嘩を売るのは止めたほうがいいと、知らない者に忠告すべきであろうかと思つたのであつた。

母、現る

Sideポチ

青い竜に呼ばれて、ポチはコニーと一緒に城の裏手の広場に来ていた。

「誰だろねえ、ポチの身内の竜って」

「父なら燃やす」

そう、青い竜がポチの身内と引き合わせてくれるというので、やってきたのだ。

一人と一匹が待つことしばし、空の向こうからばっさばっさと羽ばたきが聞こえてきた。

「あ、アオさんだ」

「もう一匹いるのである」

青い竜の見慣れた姿の影に、黒い竜が見えた。ポチと同じ長毛種竜である。

二つの姿はすぐに眼前に迫り、どしーんと大地を揺らして着地した。

「おつきいポチがいる」

コニーが口を開けたまま見上げている。

「ポチ、コニーも一緒か。少々待たせたな」

「まあまあまあまああ」

青い竜の挨拶を押しつけて、黒い竜がのっしのっしとポチの前に進み出てきた。そして大きな頭をずいっとポチに寄せてきた。鼻息で吹き飛ばされそうな距離である。ポチの隣で「わああ」とコニーがよろめいている。

「よく来たわね坊やちゃん、聞いたわああのボンクラのせいで引越し最中に迷子になったのですってねえ。それにしてもいい魔術師に出会ってよかったわあ、これが性悪魔術師だったらどうなっていたかしれない、ああ怖い怖い」

息継ぎなしでこの台詞を言い切った黒い竜に、ポチとコニーはもちろん青い竜も口をさしはさむ余地がなかった。

「わたくしは契約のため王都から離れられないとはいええ、あのボンクラに引越しを任せたのは間違いだったわあ、監督不行き届きなわたくしを許してちょうだい坊やちゃん。ああでも坊やちゃんは幸運にもこうしてわたくしの元へ戻ってきたのだけれども、坊やちゃんのほかにも迷子になった子がいるのではないかしら、ああ心配だわあ、一度様子を見にいきたいわあ」

自分だけで喋って話を完結させている黒い竜に、ポチは遠い目をしていた。

「相変わらずであるな、母よ」

コニーはポチにそっくりな大人の竜に驚いていたが、怒涛のごときポチの母の会話にもだんだんと慣れてきたらしい。

「えー、やっぱりポチのかあちゃん？」

ポチの母親の横顔をじっくり観察していた。正面だと鼻息がかかるので。

「あの父とこの母から、こういう子が生まれるのだな」

青い竜はなにやら達観していた。

母親のマシガントークに付き合っている日は暮れる。ポチは母親が一人で喋るのに飽きるのを待つことにした。

「うむ、ポチの素性の話を最初にもちかけたのはこ奴でな。この辺りで黒い長毛種竜は己の子に違いないということで、父のこともわかった次第なのだ」

青い竜がそう解説してくれている間も、ポチの母親は喋り続けていた。

S i d e コニー

ポチの母親に会った。

ポチの母親は大きなポチであった。顔が近かったので、鼻息で飛ばされないように踏ん張っているのが大変だった。

ポチの母親がひとしきり喋って、喋るネタが尽きたころになって、ようやくコニーはポチとの衝撃の出会いについて語った。出会った頃のぼつちい灰色毛玉っぷりについては、

「まああ、幼いながらもサバイバルにがんばったのねえ。えらいわ坊やちゃん」

と一杯ポチを褒めていた。

ポチがちよつとぼつちやりな体型なことについては、

「早く大きくなろうとがんばっているのねえ、努力家な坊やちゃんだわあ」

と感心していた。あとで兄のピートにこのことを報告すると、ピートはホッと胸をなでおろして

「これでひと安心だ」

と言っていた。兄には何か心配なことがあつたらしい。何だか分からないが解決してよかつた。

「ポチの能天気さは母譲りか」とアオさんが言っていた。

ポチの母親は楽しい竜であつた。

ピートの主張

私はピート、コニーの兄です。

思えばコニーがポチを拾ってきたときは驚きました。だって竜ですよ？まず竜は何を食べるのかから調べなくてはなりません。毎日大人数人分の量の生肉を仕入れなくてはならなかったらどうしようかと悩みました。けれども人間と同じ食事で構わないみたいなので安心したものです。あれで生肉食だったらもう一度捨てて来させたかもしれません。そんなに食べられたら家の裏山は数日で八ヶ山になったことでしょう。

それでもすんなりと人間との生活に慣れた竜でしたが、我が家で生活の何が悪かったのか、竜はなにやら肥満気味です。コニーと同じ量を食べて、コニーは太らないのに何故竜は太るのでしょうか。太りやすい体質なのでしょうか。いつか会う親竜にしかられて襲われたらどうしようかと思っていました。親竜はそれほど深刻に考えていないようでした。このまま深く考えないでくれるとありがたいです。

今回、私は王子様に招かれてお城にうかがうことになりました。正直メンドクサ・・・恐れ多いことだと思ったのですが、ポチの友人の青い竜が送ってくれるらしいとコニーに言われて、誘惑に負けてしまいました。竜に乗るなんて！と父に鬱陶しいほど羨ましがられました。帰ったらせいぜい自慢してやりたいと思います。

今回招いてくださった王子様と、私が親友だと言われています。これにはたいへん馬鹿らし、ゲフン！大きな理由があるのです。あれは私が都の学校へ通っていたときでした。ある日、学校へ忍び込んでいた王子様（対人恐怖症のくせにこういう度胸はあるらしい）が私の目の前へ走りこんできて、

「友達になってください！」

と叫んで走り去ったのです。まさしく魔的犯行です。そのときはどこの変態かと思いました。後で聞くとあれは王子様で、私は王子様と五メートル圏内で会話した貴重な人間だとか。会話ですか、言い逃げされただけなのに。

ともかくそういうわけで、私は王子様の親友というレッテルが貼られたわけです。まあこのレッテルを最大限利用しようかとは思いますがね。

そんな王子様が、私に何の相談があるのかというと。

近々、王子様の婚約者の方が隣国からいらっしゃるのだそうです。その婚約者の方と、必ず直接お話をするようにと王様からきつく言われているのだそうです。乳母や乳兄弟ごしの会話はダメだと言われ、どうしようと困ったのだそうです。自分ではいい考えが思い浮かばず、思い余って私に相談しようと考えたのだとか。

竜ののってあんな辺鄙など田舎に一人でやって来る度胸があるなら、会話ぐらいできそうなものですがね。それとこれとは話が違わらしいのです。

しかし私としても、こんなことを相談されても、がんばれと励ますくらいしかできそうもないのですが。王子様を拘束して婚約者の姫の前に突き出せというなら協力を惜しみませんが。こういうのは、どちらかという私の母に相談すべきだったのではないのでしょうか。他人の恋愛ごとは大好物ですから。

それでも何かしらの解決策を出さなければいけない雰囲気です。

仕方ないのでコニーにこの相談を丸投げすることにしました。コニーは私から話を話と聞くと、

「わかった」

と勢いよく頷いて、ポチを連れて走り去りました。本当に分かったのでしょうか、少々不安です。

この結果がどう転ぶかわかりませんが、すくなくとも面白いこと

にはなるに違いありません。

恋は命がけ

Side コニー

「コニーはピートにお願いごとをされた。」

「王子様がね、婚約者のお姫様と直接話がしたいらしいんだ。でもね、王子様はあの通り五メートル圏内で会話ができない人だろう？ コニーの力でなんとかならないかな？」

対人恐怖症の王子様に直接会話を求めるなど、なんという無理難題を吹っかけるのだとコニーは思った。会話ができないから対人恐怖症であるのに。しかし、他ならぬピートからのお願いである。

「お話できればいいの？」

「そう、なんとかならないかな？」

「コニーの質問に、ピートが頷く。」

「今までも、なんとか近くで会話をさせようと周囲の人間が努力したそうだが、ダメだったらしい。」

「しかし、コニーはもう一度確認した。」

「お話できればいいんだよね？」

「そうだよ」

「わかったー。行こうポチ」

「了解である」

ポチを後ろに引き連れて、コニーはお城の廊下を走っていく。

「今日も元気ねー」

「廊下は走るな」

「おやつがあるわよー」

いろいろな人から声を掛けられ、それらにいちいち挨拶してまわるコニー。そうして走っていく先は、とある魔術師の部屋であった。

「おじさんこんにちはー」

「くれぐれもドアを壊すな」

コニーがドアを開ける前に声をかけると、中から注意が飛んだ。こ

れまでにコニーが三回ドアを壊しているのだから無理もない。そう
つと開けたドアの先にいたのは、中年の男性であった。

「今日は何用だ」

「ちよつと道具を作るんだあ」

コニーはにっこり笑って部屋の中まで入っていく。

この男性、実は都にいますおじさんのお兄さんであった。つまりは
この男性も母のお兄さんであり、コニーのおじさんなのだ。

「それはまた、何の道具だ」

「あ、ね、お話する道具なの」

コニーはさつそくおじさんの部屋の搜索を始めた。

Sideポチ

ポチのお城での生活は、実は忙しかった。

というのも、ポチが実施している調査についての項目が増えたか
らである。

「魔術師の血は胃腸によいのか滋養強壮に効くのかどちらであるか」
この質問に、一応聞いてやった父は胃腸によいのだと答えた。

そして今回会った母にも、同じ質問をしたところ。

「あらあ？カゼを引いたときの飲むのではないかしらあ？」

という、第三の意見が提示されたのだ。想定外である。

しかも、この調査項目は条件が厳しい。まず、丈夫な種族である
竜はめつたにカゼをひかない。ゆえに、カゼ薬としての効能を確か
めるのは困難である。どうやったらカゼに効くという実証を得られ
るのかという難問に挑みつつ、今までの調査もこなしていたポチで
あった。

そんなポチに噛み付かれるのを警戒しているコニーのおじさんで
ある魔術師は、この調査を意味が無いので止めさせるように他の魔
術師から要請されていた。ポチの噛み付き被害が多数出ているのだ。
何より恐ろしいのは、魔術師の血に効能があるという結果に至った
場合であろう。常備薬代わりに連れて行こうとか他の竜が考えたら

どうしてくれるのだ。

しかしこの被害の困った点は、ポチが噛み付くのは魔術師のみであるゆえ、他の城の者は他人事であることだ。ポチの調査結果を待っている者もいるのだとか。他人事だと思っただけで面白がっているのではある。都でも同様の調査を行っていたので、ポチは魔術師の間である意味有名になっているのであった。

そんなポチが、コニーが道具作りにかかりきりになっていてヒマなので、魔術師に気になったことを聞いてみた。

「王子様は五メートル以内で他人と会話するとどうなるのだ？」

じんましんが出るとか、しゃっくりが止まらなくなるとか。何か症状が出るのだろうか。そんなポチの素朴な疑問に、魔術師が答えた。「泡を吹いて気絶するみたいだな」

そんな、森で突然クマに出くわしたのでもあるまいに、とポチは思った。

なんとも人生命がけな王子様である。

王子様の主張

わたしはこの国の王子です。

幼い頃からの緊張癖と赤面症のせいで、何をやっても失敗ばかり。父上の言いつけを満足にこなせないわたしは、いつの頃からかすっかり対人恐怖症となってしまいました。

王子たるものがこのようなことではいけないとわかっているのですが、相手の方の顔が判別できる距離にすることができないのです。失望の顔が見えたらどうしようと考えると、それだけでもう動機息切れがしてきます。

そんなわたしにも、友達といえる方がいます。なんと！かの有名な英雄と魔女の子供なのです！名前はピートさんといいます。以前にピートさんがおじさんの家から都の学校に通っているらしいと噂に聞き、どうしても会ってみたくなったのです。きつとすばらしい方に違いない、会って挨拶をしたいと考えたわたしは、都の学校へ潜入しました。我ながら大胆なことをしたものだと思いますが、そのときはピートさん以外の人間は視界にはいらなかったのです。思い込みつてすごいですよね。

そうやって潜入した学校で、ピートさんはすぐにわかりました。もうオーラが違うのです。彼こそがあの英雄と魔女の子供だ、とわかった瞬間、私はピートさんのそばまで走りました。もつと間近で顔を見たいと思ったのです。そして、挨拶をするはずだったのに、「友達になってください！」
と言ってしまったのです。心の中の願望がつい口から出てしまったのでしょうか。恥ずかしいことです。

しかし彼は嫌な顔一つせずに、「いいですよ」と残されたわたしの護衛にお返事くださいました。とても心の広い方なのです。

ですから今回の難問を、彼に相談すれば良い知恵を貸してくれるかもしれないと考えたのです。難問とは、父上に隣国の婚約者と直

接お話をするようにと言われたことです。何でも直接顔を見たこともないわたしが、姫を嫌っているのだと隣国で噂になってきているのだそうです。隣国の姫はたいそう綺麗な方で、わたしにはもったいない姫です。嫌っているなどんでもない！ですがそれとこれとは問題が違うのです。

そうして訪れたピートさんの住む辺境の村で、ピートさんの弟に会いました。黒いぼつちやりした動物を連れていました。動物は緊張しなくてすむのでいいですね。でもその黒い動物は、動物ではなく竜でした。弟さんの契約竜だそうです。私の知る竜とは精悍な姿のものが多いのですが、なんだかその竜は癒し系です。その黒い竜のおかげで会話ができたようなものです。

わたしを村へ連れて行ってくれた青い竜の計らいで、ピートさんと弟のコニーさんと、竜のポチがわたしと一緒にお城へ来てくれることになりました。そうしてようやくピートさんに相談できました。わたしが悩みを打ち明けると、ピートさんも悩んでいましたが、コニーくんだったらきつと何か考えがあるだろうと言いました。するとコニーくんはピートさんの言うとおり、なにやら考えがあるらしく、城の筆頭魔術師の部屋に入り浸って道具を作っているそうなのです。ああ、勇気を出して相談してみてもよかったです！

ドキドキしながら待っていると、コニーくんは完成した道具を見せてくれました。なんと、コニーくんは天才です！これならばわたしだって姫とお話ができそうです！ありがとうございますコニーくん！

あとは姫とお話する内容を考えるだけです。ああでも誰かと直接お話すなんて、緊張します。しかしピートさんとコニーくんがここまでしてくださったのですから、がんばりますとも！

城下町甘味探検

Side コニー

コニーとポチはお城に来てから、ずっとお城の中にこもっていたわけではない。

もちろん、お城の中だって探検のしがいがあるほどに広いのだが、ムダに行動的であるコニーとポチにとっては、二日で飽きた。どこへ行っても同じ雰囲気だからというのも理由の一つだ。唯一面白かったのはおじさんの研究室であった。同じおじさんでも、こちらのおじさんは都にいるおじさんよりも面白いものがいっぱいあった。なんでも魔術道具の研究しているのだそうだ。以前に使ったポチとおしゃべりできる道具だって、このおじさんが昔作ったのだそうだ。いわゆるコニーとポチの恩人である。だからコニーはおじさんが大好きだ。

しかしコニーの愛はおじさんには通じない。いろんな道具を力加減を間違えて壊してしまったせいで、三日間の研究室出入り禁止を喰らった。今は大事な道具作成の真つ最中であるのだと言われれば、大人しくするしかないコニーとポチであった。

そのせいでヒマをもてあましたコニーとポチは、城下町へ美味しいものめぐりをしに行くことにした。

「ここの名物の甘いものってなにかなあ」

コニーがキョロキョロしている。

「我はあいすくりーむなるものに興味があるのである」

ポチはなにやら気になるものを見つけたらしい。

確かに、あちこちの店にあいすくりーむという看板が出ている。

あいすくりーむとは何だろう。コニーはそこいらのお店の店員さんに聞いてみた。

「おねーさん、あいすくりーむってなんですか？」

「あら坊やいらっしやい。あいすくりーむはね、冷たいデザートなの

ことよ」

店員さんは説明してくれたが、コニーには想像できない。コニーが住んでいるあたりは山の麓の比較的寒い地域であるため、冷たい食べ物というものを食べる習慣が無いのだ。

首を傾げるコニーとポチに、店員さんは「試食だからね」とスプーンにあいすくりーむなるものをのせてくれた。それをコニーはぱくりと口に含む。

「冷たい！甘い！」

ポチも欲しがっているので、ちよっぴりの量をコニーの手のひらに乗せてもらった。それをポチはペロリとなめた。

「冷たいのである！」

美味しかったらしく、尻尾をブンブン振っている。

「そうでしょう？味付けだっているいるあるわよ」

店員さんはそう言つてガラスケースの中を一つ一つ説明してくれた。

「どれにしようかなー」

「我はイチゴがいいのである」

コニーとポチはべったりとガラスケースに貼りついた。

「そうだ、おじさんにもお土産に持って行ってあげようつと」

そうすれば部屋に入れてくれるかもしれない。

そんなことを考えるコニーは意外としたたかだった。

Sideポチ

コニーがあいすくりーむを城の魔術師に持っていくというので、ポチも母にお土産に持って行ってみることにした。冷たいあいすくりーむが溶けないように、専用の箱に詰めてもらう。念のためにコニーが冷却の魔術をかけてくれた。その箱は今ポチの背に背負われている。竜の口に入ることを考えれば少量であるが、この量を人間が一人で食べれば確実に腹を壊すであろう。

まずは魔術師の部屋へ行く。休憩時間だったらしく、魔術師は部屋へ入れてくれたが、コニーが道具を壊したため早々に叩き出され

た。それでも懲りないコニーは、

「また来るね」

と言つて部屋を出て行った。コニーは怪力だけでなく、神経も図太い。

次に母のところへ行く。が、ポチ的に作戦失敗。

「まあまあまあどうしたのかしら坊やちゃん」

ドストス、と地響きをあげてこちらに近寄ってくる母の背後に、

「我が子よ、城に行くなら一声かけてくれればよいものを」

なんと、いなくてもいいのに父がいた。

「あれ、ポチのとーちゃんだ」

何でいるんだろうね？と呟くコニーに父が気落ちさせて影を背負つた。

「何故来た父」

冷たいポチの態度に、丸まっていじける父。その姿は小山のようである。コニーが登りたそうにしている。

いじけて静かになった父を無視して、ポチは母へお土産を渡す。

「母、これは今日コニーと食してきたあいすくりーむという人間の食べ物である」

「ああ、坊やちゃんって人間の文化に興味があるのね、文化交流は食からですものね、とつてもかしこいわあ坊やちゃん」

相変わらずのマシガントークぶりだが、母はその間にもポチが持ってきた箱の中身に興味深々である。コニーに箱を開けてもらつと、冷却魔術のおかげでいい具合に冷えているあいすくりーむがあった。ちなみにポチの気に入りのイチゴ味である。

母が身を伏せて、あーんと口を開けたので、箱の中身を丸ごと口の中に放り込んでやった。

「まあ冷たい、不思議な食べ物だわあ」

母が目丸くしている。そうしてあいすくりーむをごっくんと一口で飲み込んだ。

「人間の食べ物もいいものね、こんど他のものも食べてみたいわあ」
「また何か買ってくるのである」

ぜひと、コニーの母の手作りりんごパイを食べてもらいたいものだ。あれこそが人間の食べ物の中でも、ポチのイチオシなのだから。

「まああ！母親思いの坊やちゃんだわ、うれしいわあ！」

母は感激していた。持ってきた甲斐があったというものだ。

「我が子よ、わたしのぶんはないのか・・・？」

父はあいかわらず小山でいじけていた。

愛があれば大丈夫！

S i d e コニ一

いよいよその日がやってきた。

今日は王子様の婚約者である、隣国の姫が城へ到着する日である。王子様は朝から何度も気を失ってはばあやさんに叩き起こされていた。おかげで王子様はすでにぐったり気味で、婚約者に会う前になにやら死にそうになっていた。

そしてコニ一はというと。お姫様という人を見るのは生まれて初めてである。なのでお姫様見物をしようと、朝から城門付近の茂みのあたりで待っていた。長期戦になることを考えて、お城の厨房にお弁当まで作ってもらう念の入れようである。兄も来たがったのだが、卒倒しそうな王子様の励まし要員に入れられてしまい、今は懸命に王子様を励ましている最中であろう。

「ポチ、お姫様ってやっぱり金髪に青い目かなあ」

「うむ、きつと髪の毛がくるくるに巻いてあるのである」

「それでふわっふわのピンクのドレスを着ているんだよね」

コニ一とポチは、果たして本物のお姫様は、絵本に描いてあるお姫様みたいなお姫様なのか、という検証をしようというのである。

城内で聞き込みをしても、お姫様の容姿についての情報がいまいち要領を得ず、あいまいであつたことも、コニ一とポチの好奇心を煽る原因になっていた。

そしてそんなことを延々と話していたコニ一とポチの会話は、特に小声にすることもなかったため、城門に整列してお姫様ご一行の到着を今か今かと待っている兵士たちにも丸聞こえであった。ポチの声は聞こえずとも、思わず笑ってしまう会話であつたが、兵士たちの間にもコニ一とポチのお姫様イメージが伝染していき、くるくるパーマな金髪に青い目でピンクのふわふわドレスを着ているお姫様がつぎつぎと兵士たちの脳内に踊っていくのであつた。

そしていよいよお姫様がやってきた。

コニーとポチがお弁当を食べてウトウトしていると、突然ラッパが鳴り響いた。驚いて目を覚ますと、兵士のみんなも少々ざわざわとしている。コニーとポチが茂みから顔を出してキョロキョロしている、城門の向こうに白馬にひかれた白い馬車が見えた。いかにもお姫様っぽい乗り物である。もっと近くで見たくなり、コニーとポチは整列している兵士の間にくっそり紛れ込んだ。くっそりといつても大人の兵士に子供と黒い犬っぽい生き物が混じればすぐ目立つのであるが、みんな見て見ぬフリをしてくれた。

そうしてゴトゴトと白馬に引かれた馬車は城門の中へとやってきた。そうしてコニーとポチの目の前で止まった。兵士のおじさんの背後に隠れつつも、そうつと顔を覗かせるコニーとポチ。すると。

「ようやく到着したのかの?」

「さようでございます姫様」

馬車から若い男女が降りてきた。

・・・もう少々詳しく言うならば、従者らしき男性と、コニーよりも小さな少女がそこにはいた。くるくるに巻いた金髪に青い目で、ピンクのふわふわのドレスを着た少女が。

「お姫様、つてあの子かなあ?」

コニーが疑問系になるのは仕方が無い。もっと大人だと思っていたのだ。

「うむ、くるくるな金髪に青い目の、ピンクのふわふわドレスである」

まさに絵本の中のお姫様、お姫様の見本のような姿。しかし、小さい。たぶんコニーよりも年下である。

「王子様の結婚相手だよね?」

「うむ、これが噂に聞く歳の差かっぷるといっやつである」

コニーとポチがそんなことを話していると、当のお姫様と目が合った。

「おお！黒い犬がおるぞ！」

S i d e 　ポチ

衝撃の事実、王子様の結婚相手は幼い少女であった。しかも、ポチのことを犬だと思っていた。しかしすぐに、従者の青年に訂正されていた。

「姫様あれは長毛種竜の子供ですから犬ではありませんよ。そのよ
うな頭が悪いと思われそうなことを発言しないでください」

「おお竜か！竜の子供は初めて見るのじゃ！」
少々口が悪い従者の発言をさらっと無視するお姫様。いつものこと
で慣れているのかも知れない。

それからポチに乗ってみたいと言われ、従者の青年からも丁寧に
お願いされてしまったポチは、お姫様を背中に乗せて城を歩くこと
になった。子供を乗せるのは村でよくやることであるのかまわな
いのだが、できれば背中の羽の毛をむしるのは止めて欲しい。ハゲ
たらどうしてくれるのだ。

そうして、王子様が待っている部屋へと向かった。部屋の前には

コニーの兄がいた。

「にーちゃん！」

コニーはピートの元へと走って行ったが、お姫様を乗せているポチ
は着いていくわけにはいかない。コニーとピートが言葉を交わすと、
ピートが腹を抱えて笑い出した。ひーひーと苦しい声が聞こえて
くるほどの大笑いである。

「あの者はなにゆえ笑っておるのじゃ？」

「何か彼にとって面白い出来事があったからだと思われませう」

ポチの背中でのそのようなやり取りが成されていた。

「ひー、ぐはっ、えー、ようこそ。王子様は中にいらっしやいます」

ピートは出迎え役だったらしい。無理やり笑いを飲み込んで、なん

とか挨拶らしきものをした。

「おお、そうか」

お姫様はそこでようやくポチの背中から降りた。

「竜の子よ、感謝する。この羽根は宝物にするでしょう!」

につこり笑顔のお姫様。なんと、お姫様に背中の中の羽根を五枚もむしられていた。あとでコニーにハゲていないか確かめてもらおう。

「あのひとロリコンか! あー笑えるー、ひー」

ピートはまだ笑っていた。

S i d e コニー

いよいよ王子様とお姫様の対面である。

とつても広い部屋の、端と端に王子様とお姫様は立っていた。王子様の会話適正距離の五メートルである。

「殿下!」

お姫様が王子様に声をかけるも、王子様がもじもじしている。とてもではないが会話にならない。

そこで! コニーが考案した道具の出番である。

「お姫様、このコップを持ってー」

「これは何なのじゃ?」

コニーがお姫様に渡したのは、紐がついたコップであった。そして紐の長さは五メートル。

「あのねー、離れていても会話が出る道具なの。俺とポチで魔力を込めるからねー」

お姫様が持っているものと、同じものを王子様が持っている。

そう、これがコニーが出した答えであった。近くで会話ができないのならば、遠くでも会話ができればいいじゃないか作戦である。今まで誰も気付かなかった発想の転換である。以前ポチとの会話で使った道具を改良したものである。魔力で会話を伝達させるので、魔力のない王子様とお姫様の代わりに、コニーとポチで魔力を込めるのだ。王子様の持つコップには、ポチが魔力を込めている。

「おお、声が聞こえる！これが殿下の声なのか？」

こうして王子様とお姫様は、初めて直接会話をしたのである。

これでミッシェンクリアーだ。

この後王子様とお姫様がどうなったかというところ？

「愛さえあれば大丈夫なんだよ！カーちゃんが言ってた！」

「羽にハゲができたのである・・・」

「もう少し大人になればいいんだよね、今はロリコンだって幸せに暮らした・・・のかな？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6358u/>

迷子の竜、お城に行く

2011年9月3日23時42分発行